

国語科授業案：教科で育みたい人間像  
「言葉を大切にして、自らの思いを表現していく人  
」

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2023-03-17 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小野, 祐一郎 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10297/00029487">http://hdl.handle.net/10297/00029487</a>

# 国語科授業案

## 教科で育みたい人間像 「言葉を大切にして、自らの思いを表現していく人」

授業者 小野 祐一郎

- 1 日時 令和4年10月14日（金）第2時 11：30～12：20  
 2 学級 2年B組（2年B組教室）  
 3 題材名 走れメロス ―王は何によって心を動かしたのか―

### 4 本題材で願う学び

王の心を動かした理由について、メロス自身も語り手も分からぬものや力について三つの視点から考えることを通して、メロスの走る目的の一つに王の存在も考えられるのではないかととらえ、メロスの人間性をもう一度見つけ直す。  
 （学習指導要領との関連：〔思考力、判断力、表現力等〕C(1)イ、オ）

### 5 題材観

#### (1) これまでの子どもたちの学び

子どもたちは1年時に「星の花が降るころに」や「少年の日の思い出」を読み、物語を読み深めていく上で情景描写や、語り手の語る内容に着目することについて価値を見いだすようになった。

「星の花が降るころに」では、銀木犀ぎんもくせいにかかわる情景描写が、これまでの主人公とこれからの主人公の心情の転換点となっていることに気づき、心の成長を読みとっていった。その上で、改めて「星の花が降るころに」というタイトルに注目することで、タイトルが示す内容について、それぞれが抱いた読みを語り合う姿があった。

2年生では、菊池寛の「形」の学習において、「槍中村の強さとは」を切り口に授業を行った。

主人公である中村新兵衛は腕の立つ武士であったが、普段とは異なる鎧を着て出陣した際には瀕死の状態に追い込まれてしまう。敵味方から一目を置かれる存在であったのにも関わらず、見た目だけで生死が決まってしまうことについて疑問をもった子どもたちは、自分のことはわかっているつもりでも、実は一番わかっていないものだと考えた。また、自分に対する他者の評価が自分のものになっていくことを読みとった子どもたちは、タイトルである「形」が何を表しているのかに注目した。そして、主人公にとっての形や敵にとっての形など、「形」が象徴する内容について議論を重ねることで、抽象的な表現に注目し、自らの言葉にしていく姿があった。

#### (2) 三つの視点で題材を読んでいくこと

王の心を動かした理由を考えるためには、メロスの人間性の変容を読み取る必要があると考える。そのために、以下の三つの視点をもって読むことで、本文中には直接描かれてはいないメロスの人間性をとらえる

ことができるだろう。

#### ①王の視点に立つことで見えてくるもの

「走れメロス」は人間の信頼と友情の美しさ、圧政への反抗と正義とが、簡潔な力強い文体で表現されている。ストーリー自体は主人公が約束を果たすことによって、人間不信に陥っていた王が、再び人を信じられるようになるという単純なものである。

しかし、丁寧な読みとりを重ねていくとメロスが約束を守ったから王が改心できたことと断言できないことに気づくだろう。王の発言に下の二つがある。

**発言A** 「おまえなどには、わしの孤独の心がわからぬ。」

**発言B** 「わたしには、人のほらわたの奥底が見え透いてならぬ。」

何の考えもなしに暴君の存在に憤りを覚えたメロスが王城に侵入したとき、王はどこの誰とも知らないメロスに対して自分の悩み（**発言A**）をいきなりぶつけている。また、メロスに人の本性を見抜けること（**発言B**）を伝え、メロスの提案をあえて受け入れることで、自らの正当性を世に知らしめようと瞬時に思いついた。よく言えば、人の本性を見抜ける洞察力があるのだが、実際の所は人の本性のせいにして、自身の残酷な思いをぶつけるだけの暴君であることを証明してしまうやりとりであった。

この第一場面で重要なことは、メロスが

「人の心を疑うのは、最も恥ずべき悪徳だ。」

と語っていることだ。民の忠誠を疑っている暴君から町を救いに来たと王にストレートに伝えたが、この主張は王には届かなかったのだ。それどころか、メロス

は短剣をもって王城に忍び込んでしまったため、ただの反逆者であり、命を賭けて王に本当に伝えたかったことを軽くあしらわれてしまった。そして、王にとっては三日目の日没までに帰ってくるかどうかの問題であり、メロスにとっては約束を果たし磔になることの為に走るという二人の考えがずれたまま物語は進んでいくことになる。

しかし、三日後、約束通り戻ってきたメロスとセリヌティウスのやりとりを見た王は、

「おまえらの望みはかなったぞ。おまえらは、わしの心に勝ったのだ。信実とは、決して空虚な妄想ではなかった。」

と二人の人を信じる心について、メロスだけではなく、セリヌティウスに向けても自ら口にしている。第一場面でメロスが伝えようとしていたことが、ここではあっさりと言わっているのだ。さらに、

「どうか、わしも仲間に入れてくれまいか。どうか、わしの願いを聞き入れて、おまえらの仲間の一人にしてほしい。」

と立場を逆転させる発言をしている。

三日前に、二人が交わした約束は、処刑の延期である。メロスが間に合い、恩赦としてセリヌティウスと最期の別れの時間を与えるのは問題は無いらろう。約束を守ったメロスに対して、王が果たすべき約束は、刑の執行である。間に合ったメロスに対して、王は処刑する必然がある。しかし、単純に約束を守ったメロスに対して王が掛けた言葉は仲間に入れて欲しいなのである。

これも、王がメロスに語った孤独に関することとつながっている。誰よりも賢く、猜疑心も強かった王にここまで言わせられたのには何か特別な理由がありそうだ。

初対面の日には、言葉ではわかり合えなかった二人。しかし、三日後に再会した時にはメロスの言葉が届いたのだ。王城に乗り込んできたメロスと一体何が違うのだろうか。メロスを許した王の視点からメロスを見つめることで、メロスが自他共に認める勇者となる要素が確認できそうである。

## ②メロスが走る理由の視点から見えてくるもの

メロスほど自分の気持ちに正直な男はこの世にいないのではないだろうか。そのような利害関係にとらわれず、後先を考えずに行動できるメロスだから、走る目的は約束を守るためだと断言したいところである。

しかし、実際はそうでもない。メロスが走る理由にかかわる描写は以下の通りである。

**理由A** あの世界に、人の信実の存するところを見せてやろう。そうして笑ってはりつけの台に上ってやる。

**理由B** 殺されるために走るのだ。

**理由C** 身代わりの友を救うために走るのだ。

**理由D** 王の奸佞邪知を打ち破るために走るのだ。

**理由E** 信じられているから走るのだ。

**理由F** 間に合う、間に合わぬは問題ではないのだ。人の命も問題でないのだ。私は、なんだか、もっと恐ろしく大きいもののために走っているのだ。

**理由G** 私だ、刑事！殺されるのは私だ。

**理由A～G**を見ると、「自分の信じるものを証明するために処刑される」という内容が半数を占めていると言える。これらの描写は、自分の命さえも省みずに走るメロスの誠実さが見えてくるだろう。

メロスの当初の走る目的は、**理由A**である。これには、メロス本人にとってシンプルなようで受け入れにくい内容が含まれている。王に信実を証明することを果たしたメロスに待ち受ける結果は処刑である。いくら信じる道を突き進めるメロスほどの男でも、後者である処刑されるために走ることは受け入れがたいらしく、この世への未練を語る描写が後を絶たない。荒れ狂う濁流を突破し、山賊との戦いを終え、身体の限界を迎えたときに間に合わなくても仕方ないと自分に言い聞かせている。

しかし、「信実」を何よりも重んじ、妹に「おまえの兄のいちばん嫌いなものは、人を疑うことと、それから、うそをつくことだ。」と語ったメロスが『自分が約束を果たすことを信じていない』ことには疑問を感じる。自分ができていないことを人に問うても響かないものである。ましてや、自分が勝手に取り付けた約束の担保に、本人の承諾もなしに親友の命を掛け金にあててしまった男のやることには、共感しにくい思いを抱くだろう。そもそも、語り手が言う「単純な男」なのだから、絶対に何が何でも間に合わせると語ってほしいものである。しかし、身体の限界を迎えたときのメロスは自分が約束を果たせると信じられなかった。ここが刑場で王と再会したときのメロスと異なる点の一つと考える。

岩の裂け目から湧き出ている清水のおかげで疲労回復とともに、義務遂行と我が身を殺して名誉を守る希望が生まれたメロスの走る目的は、『処刑されるため』

となる。「私の命などは問題ではない。」「私は信頼に報いなければならぬ。今はただその一事だ。」と正直な男のままに死んでいくことを切望している姿がある。そして、すれ違った人から不吉な会話を小耳に挟んだ瞬間「その男のために私は、今こんなに走っているのだ。その男を死なせてはならない。」と友の命を守るために走る目的が変わる。

その後、親友の弟子フィロストラトスから刑の執行まで猶予がないことを聞かされ、セリメンティウスが強い信念を持ち続けながら「メロスは来ます」と王のからかいに抗い続けているようすを聞いたメロスの走る目的は、二転三転する。

メロスは理由EFのように、感じたり考えたりしたことをフィロストラトスに語りながら疾走を続ける。この目的の変化はメロスの人物像を考える上でも重要になってくるだろう。

### ③語り手の視点から見えてくるもの

本作品における語り手は、話の進行をつかさどり、全てを知った上で話を進めているようすがある。冒頭から、「メロスには政治がわからぬ。」とメロスの単純さをストレートに表現している。また、王城へ戻る間の表現には、「のんきさを取り返し」「好きな小歌をいい声で」「ぶらぶら歩いて」などは、肯定的にとらえていないようであり、メロスの勇敢さを語る一方で、一牧人として平凡なメロスの姿を取り上げているようすもある。「メロスほどの男にも、やはり未練の情というもの是在る」という一文には、語り手の視点でメロスを見ているようすが読みとれる。

すでに体力は限界を超えているのにも関わらず、メロスは疾風のごとく刑場に間に合うわけではあるが、語り手もメロスがこのようなボロボロの状態であるにも関わらず、どうして走っているのか理解できていない描写がある。

「メロスの頭は空っぽだ。何一つ考えていない。ただ、訳のわからぬ大きな力に引きずられて走った。」

と語られているのだが、このような語り手の発言は他では見られない。

誰よりもメロスのことを知っている語り手が「訳のわからぬ大きな力」と表現し、メロスも「なんだか、もっと恐ろしく大きいもののために走っているのだ。」と両者の見解が『不明』という点で一致している点に王の心を動かした理由が含まれているのではないかと考える。

メロスが語る「恐ろしく大きいもの」がセリメンティウスから寄せられている「信頼」であるのならば、そ

う語れば良いのではないだろうか。

単純な男が感じる「恐ろしく大きいもの」は、これまでのメロスが抱いたことのない思いなのかもしれない。それは、王に自らが最も大切にしている信実を証明するために命を捨てる覚悟が決まったことと、濁流や山賊という障害に出くわした際に自らの意志を信じることができなくなったことで新たにメロスに宿った考え方なのではないだろうか。

王に人を信じろと主張したメロスであるが、刑場までに立ち足かかる壁の前に、自分を信用できなくなったことで初めて王の感じている人間不信の実感が身をもってわかったのだと考える。これまでのメロスは王を見下していた素振りがあるが、人間不信の念が自分の中にもあることを自覚することにより、王の気持ちに気づけるメロスになったのではないか。

それにより、親友のセリメンティウスが刑場よりメロスの命を賭した目標達成を願う思いだけでなく、刑場より王が心のどこかでメロスに間に合って欲しいと願っている気持ちにも引きずられて走ったのではないだろうか。

単純な男には複雑なことはわからないものだ。これまで自分が抱いたことのない王の寂しさに寄り添おうとする気持ちは、死力を尽くして走っているメロスにとって複雑な感情だろう。

一方、その姿を見ている語り手にとっても、独善的なメロスが誰かのために命を賭けている場面など見たこともない。だからこそ「訳のわからぬ大きな力に引きずられて走った。」と表現したのである。

心のどこかで王と自分との共通点に気づき、同類相哀れむことができるようになったメロスだからこそ、王が人を信じられるようになるためにも走り抜き、王も心のどこかでメロスが戻ってくると信じていたからこそ、暗殺に来たメロスとは異なり、自らの思いをさらけ出し、自分の思いに応じてくれた人たちの仲間になりたいと語ったのだと考える。

### (3) 本題材で願う子どもの姿

本題材では、メロスの人間性を見つめ直していくことで、以下のような三つの姿が見られることを願っている。

- ①王の視点からメロスを見つめることで、一見王とメロスが対称のように見えるものの、実際の所は似た者同士であるということにも気づき読みを深めていく姿。
- ②メロスを許すだけでなく、仲間に入れてほしいと懇願するほどに考えが変わった王に、どのようなことが影響したのかを描写を根拠に考えていく姿。
- ③子どもたちは物語をより深く読みとり、登場人物の

抱く思いや生き方と照らし合わせながら読み味わうことで、題材に描かれた価値や人々の生き方に迫る姿。

題材に出会った子どもたちは「王は何によって心を動かしたのか」という追求テーマがあるので、王の視点を持ちながら、読み進めていこう。その中で、対称的に描かれていたメロスの姿に王との共通点を見つけ、「メロスも語り手も明白に語れない謎の力」と

らえることを通して、登場人物や語り手の言動、情景描写などを関連づけながら、新たなメロス像をつくりあげていくことを願っている。そして、叙述にはあらわれていないが、読みとった内容を結びつけることで初めて見えてくるメロスと王の関係から、メロスが真の勇者となっていく壮大な話を読み味わう姿に期待している。

## 6 題材構想（全9時間）

- (1) 「走れメロス」と出会い、感想を共有しよう（2時間）
- (2) 「王は何によって心を動かしたのか」を追求しよう（2時間）
- (3) 「王は何によって心を動かしたのか」について追求したことを共有しよう（1時間）
- (4) 「もっと恐ろしく大きいもの・訳のわからぬ大きな力」とはどのようなものか（2時間）
- (5) メロスの人間性を見つめよう（2時間）

## 7 題材構想観にあたって

本題材で願う姿を生み出すために、題材を通して、物語を様々な視点から読み深めることで初めて気づくことができる描写や人物像を再認識し、叙述を根拠に丁寧な読みとりを重ねることの面白さを実感できる題材を構想した。

走れメロスを通読した子どもたちは、個性的な主人公の性格に様々な思いを抱くだろう。また、最後には勇者と語られるが、おおよそ勇者らしくはない振る舞いが多いメロスや、メロスと対称的な聡明であるが冷酷な王と出会った子どもたちは、自分の読みを語りたくなるので、感想の共有の場を最初に設定する。感想を共有していく中で、この物語を読み深めるために必要な疑問点がいくつも出てくるだろう。

様々な疑問を抱いた子どもたちが、メロス自身の台詞・語り手から見たメロス・王から見たメロスなど複数の視点からメロスを理解していけるように「王の心を動かしたもの」を追求テーマに設定する。このテーマを追求すると、包括的に様々な内容について目を向けられる利点がある。全体共有を通して、子どもたちは王が心を動かした理由にメロスの走る目的の変化が影響しているのではないかと気づき、メロスが言っていた「もっと恐ろしく大きいもの」に注目していこう。そこで、授業者は子どもたちの抱く疑問から「もっと恐ろしく大きいもの・訳のわからぬ大きな力」とは何かと発問する。これにより、メロス本人も語り手も、読み手もはっきりと語れない謎の力の正体に迫るために、子どもたちはこれまでの読みとりを生かしながら、さらにメロスの変容に関する読みを深めていくことをねらっている。

学習の終わりに各自が初読で抱いたメロス像とこれ

までの読みとりを比較することで、題材に描かれた価値や人々の生き方に迫る場面を設定した。

以下は予想される子どものあらわれである。

### (1) 「走れメロス」と出会い、感想を共有しよう (2時間)

「走れメロス」は太宰治の短編作品である。すでに読んだことがある子どもや、あらすじを知っている子どもも少なくはないだろう。導入として、メロスが大切にしている「信実」という言葉を子どもたちに見せる。子どもたちは、「本当のこと」と答えるだろう。そこで授業者が「真実」と「信実」の違いは何だろうかと聞くと、子どもたちは信実とは、嘘をつかない誠実なことを示すと調べるだろう。そして、子どもたちの何人かに自分の中で「信実」でありたいことを質問する。おそらく、自分の将来の夢や自分の仲のいい人間に対してなど、それぞれが思いつく信実について考えていこう。ひとしきり信実について話をしたところで、本文を印刷したプリントを配布する。

今回は子どもたちが抱く作品への第一印象を大切にするために、教科書に書かれている教材の目標などを削除したものを配付する。そして、教師の範読を通して、作品の世界へ入り込んでほしいと考えている。

物語を読み終わった子どもたちからは、以下のような意見が出てくるだろう。

#### 【メロスについて】

- ・真っ直ぐな人
- ・正義
- ・勇者。
- ・実際の友人だとしたら付き合いにくい。

- ・言動がころころ変わる人
- ・迷いながらも約束を果たした人
- ・ものすごい速さで走った人

**【王について】**

- ・疑わしい人は殺してしまう人
- ・賢いので口喧嘩では論破されさそうだ。
- ・最後に仲間に入りたかったのはなぜか。

**【セリヌンティウスについて】**

- ・よく理由も聞かずに身代わりになれるものだ。
- ・王からはどのようなからかいがあり、何と言い返していたのだろうか。
- ・メロスに振り回されたのに、殴らせたのはなぜか。

**【物語について】**

- ・メロスVS王＝正義VS悪
- ・語り手はメロスのことをどう思っているのか。
- ・古代ギリシャのような雰囲気だけれど、漢字の表現が多くて読むときのリズムが良い。

様々な感想や疑問を話していく中で、物語のキーパーソンであるメロスと王について子どもたちは以下のように話していくだろう。

**【メロスに関して】**

- ・メロスは、人が生きる上では「信実」が何よりも重要だと考える真っ直ぐな男である。
- ・買い物しようと町まで出かけたなら、久しぶりに訪れた町の雰囲気の悪さに気づき、罪もない老人に詰問してしまう。そして、何の作戦もないまま王城へ乗り込んでしまう。単純な男だ。
- ・王に「人の心を疑うのは、最も恥ずべき悪徳だ」と語るものの、本来の目的を忘れてしまう。そしてまた突然本来の目的を思い出す。一貫性がない。
- ・「死ぬる覚悟でいる」とは語るものの、大切な唯一の肉親である妹に亭主をもたせてやりたいという思いも強いために、なりふり構わず王に情けをかけろと要求する。優しい男だ。
- ・三日という猶予の担保にしたのは親友セリヌンティウスの命。自分の取る行動になんら迷いをもたないメロス。この後も思うがままに行動をしていく自由気ままな主人公である。

また、メロスと対立している王については以下の内容に関する発言が出てくるだろう。

**【王に関して】**

- ・このシラクスの町の統治者であり、かつては民を信じ、民からも愛されていたようだ。しかし、現

状は、非常に強い猜疑心から民の命を奪う暴君と成り果ててしまった。

- ・威厳をもった蒼白な顔で「人の心は、あてにならない。」「信じては、ならぬ。」と性悪説をふりかざす暴君である。その一方で、最後の場面で「わしの願いをききいれて、おまえらの仲間の一人にしてほしい」と語った瞬間に群衆から「万歳、王様万歳。」と歓声が起こったことから、かつての王が民から信頼を得ていたことが読み取れる。
- ・初対面のメロスに「おまえなどには、わしの孤独の心がわからぬ。」という台詞から、王が大切にしたいものは人であることが読み取れる。それゆえに、メロスと王は「信実」「人を信じること」についてぶつかってしまう関係なのかもしれない。

対称的にも見える二人の人物像を述べた子どもたちは、板書された内容を比べ、次のような思いを抱くだろう。

- ・メロスも王も実は似ているのではないか。メロスは「信実」「友情」「愛と誠」を大切にして、嘘をつかない誠実な生き方があるべき人の姿だと考えている。
- ・王はメロスと立場や人生経験は大きく異なる。違うのは、権力があるので、メロス以外の人間が逆らわないので、自分の信じたものを貫くことができる。思ったことを実現してきたところもメロスと異なる。考え方のベースはメロスと正反対の「他人を信じてはいけない。」であるが、我が道を進むという意味では二人は似ているのだろう。

登場人物の人物像が少しずつ見えてきたところで、子どもたちはこの物語の語り手がメロスのことをよく知っていることに注目していくだろう。そこで、授業者は「語り手はメロスをどのように見ているだろうか」と子どもたちに問いかけていきたいと考えている。

- ・「メロスには政治がわからぬ。」「メロスは単純な男であった。」とあるから、褒めてはいない。
- ・王のことを「暴君ディオニス」と読んではいないが、「威厳」は感じているようだ。
- ・「メロスほどの男にも、やはり未練の情というものはある。」「若いメロスは、つらかった。」とあるから、メロスに同情しているところもある。
- ・語り手なのに、ナレーションではなく、メロスのセリフを語っているところもあるように見える。

子どもたちから出てきた初読の感想や疑問点について共有したところで、本文を確認し直すことで解消される疑問についてはこの場で解決していく。そのうちに、最後の一文の「勇者は、ひどく赤面した。」について疑問の声を上げる子どもが出てくるだろう。その一文について授業者は、どうしてメロスが勇者と言えるのかと子どもたちに問かけると、「暴君であった王様を改心させたから。」という意見が出てくると予想する。王を改心させるという意見は、メロスが正義、王が悪というとらえがあるからに他ならない。子どもたちはそのように考えた理由として、メロスと王の対立している立場やメロスは人を信じ、王は人を信じないという生き方から、直感的に人として正しい方はどちらか感じていることを述べるだろう。これらの意見を受けて、メロスが最後に勇者と称えられるようになるポイントとして、授業者は子どもたちに「王は何によって心を動かしたのか」追求していくことを提案する。

**(2) 「王は何によって心を動かしたのか」を追求しよう (2時間)**

前時の終わりに確認した追求テーマについて、個人追求をする時間を設定する。

前時で大まかなメロスと王の人物像についてはふれてはいるが、メロスについて良くとらえていない子どもたちが多いと考えられる。王の心を動かした理由を考えていく際には、各自が詳細なメロスの人物像を確認しておく必要があるだろう。子どもたちは、メロス自身のセリフや考え方、王から見たメロス、語り手の語るメロスなど、様々な視点から改めてメロスをとらえていこう。各自がテーマについての意見を持ち、仲間の意見を聞きたくなくなったところで、全体共有に入る。

**(3) 「王は何によって心を動かしたのか」について追求したことを共有しよう (1時間)**

前時までに、子どもたちはそれぞれの視点でテーマを追求してきた。全体共有に入ると、子どもたちからはテーマについて以下の意見が出てくるだろう。

**【メロスに関する内容】**

- ・約束を守ったこと
- ・期限までに刑場に現れたこと
- ・信実を証明できたこと
- ・全力を尽くし、ボロボロな体裁も気にせず、24時間テレビのマラソンのように、ギリギリで帰ってきたこと
- ・一度見た悪い夢を正直に打ち明けたこと
- ・せっかく再会した親友と殴り合ったこと

**【セリヌンティウスに関する内容】**

- ・王のからかいを受けても「メロスは来ます。」と信じ続けていたこと
- ・たった一度だけメロスを生まれて初めて疑ったことを正直に打ち明けたこと
- ・疑ってしまったので、メロスに殴らせたこと

**【王に関する内容】**

- ・二人の望みを受け止めたから。でも、二人の望みって何なのか。メロスの望みではないのか。
- ・メロスの到着を信じていたから山賊を派遣したのではないか。
- ・予想外にメロスが間に合ったから。
- ・メロスの思いに負けたから。
- ・どこかでメロスが間に合うことを望んでいたのではないだろうか。
- ・信実が空虚な妄想ではなかったから。

それぞれが見いだしたことを共有していくと、上述のような内容が出てくると予想する。

また、その他の視点として、

- ・メロスとセリヌンティウスのやりとりから王の心情に影響したと考えられる。
- ・二人とも一度疑ったことを正直に打ち明けたり、さらには殴り合って友情を再確認したりしたのがすぎる。少なくともメロスが殴るのはおかしい。
- ・最後にメロスは勇者と呼ばれているから、勇者であるメロスに影響を受けたのではないか。
- ・一回あきらめかけたのに、間に合ってよかった。でもよく間に合ったよね。

語り合いを通して三人の登場人物の思いがかかわっていることを見いだしてきた子どもたちは、満身創痍のメロスが約束を果たしたことを演出の一つとして割り切って読むことはしないだろう。子どもたちの中に、メロスが走り切れた理由を考えたい思いが芽生えてきたところで、授業者は「どうしてメロスはそこまでして走ることができたのだろうか」と子どもたちに投げかけたい。

子どもたちは、メロスの走る目的を確認するために再び本文を読み返すだろう。そこから、以下の意見が出てくると予想する。

**【信実に関して】**

- ・「あの王に、人の信実の存するところを見せてやろう。そうして笑ってはりつけの台に上ってやる。」

から、この話の人を信じられなくなった王に、人を信じることの大切さをわからせるために行動を起こしたと言えるだろう。

【自分及び友の命に関して】

- ・「殺されるために走るのだ。」からわかるように、メロスが王に信実を証明するためには、自らが約束を守って処刑される必要がある。王に人を信じさせるために自分の命を差し出さなければいけない事実を受け入れるまでには、葛藤があった。
- ・「身代わりの友を救うために走るのだ。」に関しては、自分が王に証明したいことの担保に友人を差し出してしまったので、自分の達成したいことのために友人の命を代償にしてはいけないことを指している。

【メロスの信じる正義に関して】

- ・「王の奸佞邪知を打ち破るために走るのだ。」この理由を掲げたメロスは、人を信じられない王（悪）を倒すためである。信実を証明する相手である王を走る理由にしていることがわかる。

【人の思いに応えることについて】

- ・「信じられているから走るのだ。」については、自分を信じた親友が、人質となりながらも王のからかいに耐え、刑場にて自分を信じて待っていていることを知り、それにも応えなくてはならないのだ。と、走る理由を追加しているようすが確認できる。

【なんだか、もっと恐ろしく大きいもののため】

- ・「間に合う、間に合わぬは問題ではないのだ。人の命も問題でないのだ。私は、なんだか、**もっと恐ろしく大きいもの**のために走っているのだ。」とこれまでの走る理由を自ら否定している。もっと恐ろしく大きいもののためとは一体なんのためだろう。
- ・他の走る理由よりも「もっと恐ろしく大きいもの」ということだから、今まで出てきてない理由なのだろうか。

メロスが走る理由については、物語の進展とともに変化しているようすがある。しかし、刑場に間に合うことのできたメロスが抱いていた理由は、「**なんだか、もっと恐ろしく大きいもの**のため」である。本人が理解していないこれが一体何を示しているのか、子どもたちは疑問をもつだろう。そして、その数行後ろに書かれている「ただ、**訳のわからぬ大きな力**に引きずられて走った。」という一文に自然と着目するだろう。

- ・初めは「王に信実を証明するため」だけであったが、走って行くうちに「信実を証明するために殺

される」に変わり、やがて自分や人の命の問題ではなくなったから、これ以外だろう。

- ・メロスだけではなく、語り手もメロスの考えていることがわかってないよね。だって、メロスの頭は空っぽ、何一つ考えていないと言っている。でも、本当に何にも考えていないのだろうか。
- ・語り手ってメロスのことを何でも知ってそんな感じがしたけれど、これだけはわからないということなのだろう。
- ・メロスを突き動かした力が「信頼」だけであるのなら、率直にそう語りそうな気がする。メロスは信実を最も大切にしていたから。

子どもたちがメロスも語り手も明確にできていない二つの謎について気づいたところで授業者は、「もっと恐ろしく大きいもの・訳のわからぬ大きな力とはどのようなものか」と問いかける。すぐには子どもたちも意見が出てこないと思うので、この問いについて考える時間を設けることを子どもたちに提案する。

(4) 「もっと恐ろしく大きいもの」「訳のわからぬ大きな力」とはどのようなものか（2時間）

その1

メロスが王の心を動かしたのは、メロスが走りきれたからである。物語の上で読者はメロスが期限に間に合ったことはわかっているが、どうして間に合わせる事ができたのかは直接書かれていない。子どもたちはこれまで読みとってきた様々な内容を組み合わせて、「**もっと恐ろしく大きいもの**」「**訳のわからぬ大きな力**」について自らの考えを築き上げていこう。授業者は、**その1**では個人で考えをまとめる時間とし、**その2**で各自の意見を共有する場を設けようと考えている。

その2

本時では、前時まで個人で考えた問いに関して共有を行う。子どもたちからは、以下の意見がみられるだろう。

- ・メロスはこれまでに様々な目的をもって走っていたのに、本人が自覚できていないということがひっかかる。「ただ、訳のわからぬ大きな力に引きずられて走った」とはどういうことだろうか。
- ・地の文だから、メロスの言葉ではなく、語り手が語っているのだろう。
- ・語り手は、訳がわからないと言っている。わかってはいるが、大きな「力」といっているので、メロスが感じているもっと恐ろしく大きい「もの」



に近い内容な気がする。

- メロスも語り手もわかっていないという共通点から考えると、これまでのメロスとこの瞬間のメロスは何かが違う可能性はないか。
- 引きずるって、誰がどこからなのかな。刑場からメロスを信じて待っているのはセリメンティウスだから、親友なのか。「メロスよ、間に合って王に証明しろ！」と応援しているのか。
- メロスは約束に間に合うと、メロスは処刑されてしまうはずだった。親友としては、間に合ってほしいけれど、死んでほしくもないから複雑な心中ではないか。
- 親友の他に刑場に居るのは、群衆と王だ。群衆は処刑を見に来たのだろう。ところで王は、メロスの到着を心の中ではどう考えているのだろうか。
- 前に王とメロスが似ているかもしれないと話したけれど、恐ろしく大きいものは王様にも関係しないのだろうか。
- メロスの走る目的は、時間とともに変わった。王の気持ちも最後には変わった。二人が似ているのならば、メロスが走る目的を変えられたから、王の気持ちも変わったのかもしれない。
- その場合は、メロスはどう変わったのか。
- メロスは最後に、信実を打ち明けていた。親友に悪夢を見た。間に合ったのならば、言わなくても良かったのと思う。
- メロスの走る目的は変わったけれど、それはメロスが誰のために走るかも変わったということだと考える。自分の信じるものやプライドを守るために走っていたけれど、親友の命を守るために自分に自分以外の人のことを考えていた。

描写から読み取れるメロスの変容に気づき始めたところで、その変容に迫るために授業者は、メロスどのように変わったのかと再度なげかけようと考えている。

- 刑場に間に合ったメロスは、詳細には語らなかったが、間に合わないかもしれないことを「悪夢」と正直に伝えていたから、本当の自分をさらけだせるようになったのではないか。
- 最初のころのメロスは、人を信じられないことを理由に、人を殺していく王の命を奪おうとした。気に食わないものを殺そうとする発想は、認めようしない王と一緒にいた。
- メロスは単純な男だから、間に合うと思えば間に合うし、間に合わないと思えば間に合わないのではないか。だから最後は、単純に自分を信じるこ

とを貫いたから間に合ったのだろう。

- メロスは自分が間に合わないと考えた時には、自分自身を信用できなくなったのではないか。
- メロスは何か大きなものの存在を感じている。でも、メロスは単純だから難しいことはわからない。だから言葉にならないだけなのだろう。
- 今までのメロスの考え方にはなかった変化がそこにあったのかもしれないと考えられないか。
- 自分や親友だけでなく、王の期待に応えようと思うようになったのではないか。
- 最初の場面では、王の苦勞をわからなかっただけではいなか。途中で間に合わないかもしれないと本気で悩んだことで、悩むということを知ったのではないか。
- 人に信じると語ったが、自分が苦しいときには間に合わないかもしれないと諦めかけていた。そこに悩んでいたというよりは、自分が間に合わせることを信じられなかったのではないか。
- 単純に自分だけの思いで行動してきたメロスは、自分以外の人に思いを寄せることはなかった可能性はないだろうか。
- メロスにとって、生まれて初めて自分の単純な思いだけに留まらず、相手の立場や気持ちも汲み取りながら生きる力が、約束に向かって走る間に芽生えたとはいえないか。

生まれて初めてメロスが抱いた相手を思う力だからこそ、わけのわからぬ大きな「力」なのであり、友の信頼に応えるだけでなく、王に人を信じることの素晴らしさについて、どうにかして伝えなければならぬと心のどこかで感じられるようになったのではないだろうか、子どもたちは考えていこう。

このような視点も含めて、王の気持ちを動かしたものを考えると、これまでは気づくことのできなかったメロスの人間性にも関わる変容をとらえることができるだろう。メロスに関する視点が広がったところで、次時につなげていく。

#### (5) メロスの人間性を見つめよう (2時間)

ここでは、王の心を動かすことができるようになったメロスの人間性について目を向けていくことにする。暴君を改心させたから勇者であると読み取っていた子どもたちだったが、様々な視点から読みを深めたことにより、メロスの人間性について以下のように語るだろう。

- 初めて読んだときには、メロスを勇者だと思うことはできなかった。自分の都合で親友を人質に差

し出しているのに、途中で自分のことを勇者とって鼓舞するところはどうなのかと思った。

- ・間に合ったからいいものの、間に合わなかったらどうしていたのだろうか。でも、最後には王が仲間に入れてほしいと言ってくれている。親友の期待を裏切らないことが、王の気持ちを動かすにつながった、仲間に恵まれている人だ。
- ・いくら自分が信じる正義のためとはいえ、乱暴なやり方がメロスのやり方なのだろう。思い付きで動くメロスが、親友だけではなく、王の気持ちや国をも救ったのだから、最後に語り手に勇者と呼ばれるのにふさわしい活躍ができたのだろう。
- ・メロスは単純で政治的なやり取りはできないけれども、純粋に人を信じる気持ちをもち続けられたからやり遂げられたと思う。
- ・王を敵視するだけではなく、王に人を信じさせてあげたいという思いをもっていたということが、最初のメロスと違っているところであり、勇者と呼ばれるようになった結果の理由の一つではないのか。
- ・自分の思いをぶつけるだけの存在から、人は一人では生きていけないので、お互いに分かり合えるようになることが大切だと思えるようになったのだろう。人が生きていく上で大切な相手を思いやることを、恐ろしく大きいものと感じるメロスは、やはり純粋な人だと思う。
- ・メロスは純粋に人を信じる気持ちをもち続けられたからやり遂げられたと思う。王を敵視するだけではなく、人を信じさせてあげたいという思いをもっていたということが、最初のメロスと違っているところであり、勇者と呼ばれるようになった結果の理由の一つではないのか。

メロスの呼ばれ方は、単純な男・一人の牧人から勇者として扱われるくらい、第三者からの評価が変化するのであった。第一場面におけるメロスから、最後の場面で勇者と呼ばれるようになったメロスを実感した子どもたちは、改めて以下の内容について目を向けていくことだろう。

- ・語り手に勇者と呼ばれるようになったのに、赤面させられているのはどうしてなのか。
- ・国を変えるほどの男が、少女に指摘されて赤面したというのは、普通すぎるということかなんというのか。
- ・王って、もともと人を信じていた賢明な王だった。暴君になってしまった王は、メロスのおかげでもとに戻った。元のメロスは、単純な男。メロスは今回の騒動で、人勇者に昇格したのに、恥ずかしい思いをしているというのは…空っぽだった頭から、生きている実感がもてたということなのだろうか。
- ・単純なメロスは、単純ではなく周りの人の思いに気づけるようになった。でも、これは大人にとっては普通にできるはずのことだ。王を動かした功績を考えない場合、普通のことができるようになっただけで勇者と呼んでいいものなのか。
- ・もしかしたら、特別ではない一般市民が国を救ったという実感を、読み手の私たちに伝えたかったのかもしれない。

王の心を動かしたものをテーマに物語を読み込んできた子どもたちは、主役であるメロスの変容について、それぞれの思いを語ったり、最終の「追求の記録」にまとめたりするだろう。

現実的にはあり得ない描写も含まれてはいるが、本作品には、人が人を信じることの尊さが描かれていると授業者は考えている。自分の思いをもちながら誰しも日々の生活を送っているが、人の心を動かすためには人に変われと他人の変化を期待するのではなく、まずは自分が変わることが大切なのかもしれない。

子どもたちは、純粋で読み手が恥ずかしくなってしまうくらい自分に正直なメロスや、賢く様々な経験をしてしまったがゆえに人間不信に陥ってしまった王が、再び人を信じられるようになるようすを読みとってきた。授業者は、「走れメロス」の登場人物の思いや生き方にふれた子どもたちが、自分や人の思いの尊さに目を向け、素直な気持ちで接することを大切にしてほしいと願い、この授業を閉じる。

参考文献：佐々木義登（2007）「勇者の条件—太宰治「走れメロス」論—」『二松學舎大学創立130周年記念若手研究者入賞論文集』。

田中実（1993）〈「メタ・プロット」へ—「走れメロス」—』『都留文科大学研究紀要』。

花山聡（1992）『「走れメロス」考—メロスは誰のために走ったのか—』成蹊論叢。